

認知症とは

認知症とは何かを学びましょう！

1995.4

グループングケア研究会

代表 遠藤 邦弘

1 認知症とは…

「うちのおばあちゃん、最近物忘れがひどくなって…」高齢者と生活をともにしていると、しばしばこうした悩みが持ち上がります。たとえば、モノや場所などの名前を忘れ、「あれ・それ・あそこ」などの代名詞が多くなる物忘れです。会話の最中に肝心の名前が出ず、もどかしい思いをした経験がある人も多いはずですが、この程度なら老化の範囲内、つまり年相応の物忘れと考えていいのだろうか？

問題なのは「あれ・それ・あそこ」といった名前の記憶にとどまらず、体験した記憶がすっぽり抜け落ちてしまうことなのです。例えば旅行をした場所の名前を忘れるだけでなく、旅行したこと自体や旅行の一部を全く忘れてしまう場合。こうなると、年相応の物忘れではなく、認知症による物忘れの疑いが強くなります。

2 認知症は脳の病気

認知症は、老化ではなく、脳の病気が原因となって引き起こされます。認知症の原因にはいろいろあるが、最近増えているのはアルツハイマー型の認知症です。日本認知症ケア学会によると、85歳以上の高齢者では、約25%前後の人がアルツハイマー型認知症であると推定されています。

アルツハイマー型認知症についてはまだよく分かっていないが、脳の神経細胞の減少や機能の低下によって引き起こされる病気で、脳内に沈着する異常なタンパク質が関与しているのではないかとされています。

3 アルツハイマー型認知症以外のおもな認知症

●血管性認知症

脳出血・脳梗塞などの病気が原因で脳の神経細胞が減少し、認知症を発症。60～70代の男性に多い。

●ピック病による認知症(前頭側頭葉型認知症)

前頭葉から側頭葉にかけての脳が萎縮し、認知症を発症。人格が変化し問題行動が多くなる。

●レビー小体型認知症

脳の神経細胞にレビー小体が出現し、認知症を発症。幻視などの幻覚がみられることが多い。

4 アルツハイマー型認知症のサイン

私たちは一般的に、認知症というと徘徊や妄想といったイメージがあのですが、こうした症状は現れないこともあり、また、現れるとしても病気がかなり進行してからです。家族

など、近くにいる人が早い段階で変化に気づけば、適切な治療によって症状を改善させたり、進行を遅らせることも可能となります。

探し物ばかりしている、同じ物を何度も買ってしまふ、勘定を間違える、入浴を忘れる、道を忘れる、事故をよく起こす…こうした日常生活における機能低下がサインとなるほか、下表のような認知症診断のための評価スケールも目安となるので参考にして下さい。現在、医療機関で認知症を診断するためには、わが国で開発された「改訂長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)」がよく用いられています。見当識(現在の自分の状況を正しく認識していること)、記憶、失語、計算力などの状態を短時間で測ることができ、合計点が20点以下であれば認知症が疑われるとされています。

シグナルからの「ポイントケア」は、今どの時代を生きているか知ることである。